

論文——シンポジウム「ヴィクトリア朝と音楽——せめぎあう境界」

“George”をめぐる音楽

吉田 朱美

昨日11月22日はちょうど音楽の守護聖人である聖 Cecilia の日であったこともあり、本日、ヴィクトリア朝の音楽に焦点を当てたシンポジウムに参加できることを嬉しく思います。20世紀初頭、ドイツ人の批評家 Schmitz 氏によって <<Land ohne Musik>> 「音楽なき国」と呼ばれたイングランドでしたが、19世紀に音楽が英国の社会において、また人々の生活において大きな存在感を放っていたことは、当学会で上宮真紀先生がご発表されたブラスバンド運動や、18世紀からウィーンに先駆けて発達していた大合唱団の文化などからも明らかです。合唱団はヴィクトリア朝においても引き続き、さまざまな階層の人々が隔てなくふれあう貴重な場でありつづけましたし、ミュージック・ホールは大衆にとっての主な娯楽の一つとなっていました。そして19世紀後半の後期ヴィクトリア朝と呼ばれる時期には、音楽は文学や美術といった他の芸術ジャンルによって模倣され、表現される対象として特権的な地位を付与されるに至っていたようにも思われますし、過渡期という意識を人々が強く持っていたこの時代、音楽こそが、新たな時代の芸術や精神のあり方を示す道しるべとしての役割を担わされていたのではないかとさえ思われるところもあります。それは1890年代の雰囲気凝縮しているとも言われる、John Lane 社発行の小説・短編小説のシリーズのタイトル、Keynotes Series にも表れています。

「ヴィクトリア朝と音楽——せめぎ合う境界」と題されたシンポジウムになりましたが、これまで主に世紀末の小説作品を中心に読み、研究してまいりましたので、吉田担当の25分間では、とくに音楽と文学とのインター

フェイス、中でも1880年代から90年代の散文作品が、主題と形式の両面においてそれまでの既存の型や枠組みを打ち破り、新たな可能性を模索していく中で、音楽という別の芸術ジャンルとの交流がいかに大きな役割を果たしたかを、イングランドの守護聖人の名でもある“George”という固有名詞を手掛かりとしつつだどっていくことにしたいと考えます。

I. 共感覚的な芸術の融合と George Egerton (1859-1945)

Alison Byerly は『19世紀文学におけるリアリズム、表象と諸芸術』(Realism, Representation and the Arts in *Nineteenth-Century Britain*, 1997) という著書の中で、文学の中に表れる音楽のイメージについて分析し、「音楽における形式と内容の融合の為、ロマン派の人々は音楽を表現内容そのものであり、人工性とは無縁の表現であるとみなした」(189)といいます。この「音楽における形式と内容の同一性」という考えは、Walter Pater (1839-1894) の *The Renaissance* 中の有名な一節「すべての芸術は絶えず音楽の状態をめざす。なぜなら、他のすべての芸術においては内容と形式との区別が可能で、知力によって常に区別されるのであるが、その区別をなくすべく芸術は絶えず努めるものなのだから」(111)にも表れていますが、芸術至上主義者たちは、このような音楽の性質を、芸術が道徳性から自由であることを正当化するものと考えたのだと Byerly は述べます。音楽が表している「もの」の道徳性を判断することは不可能であるからです(189)。

さて「音楽と他の芸術ジャンルとの交差」といえばまず思い出されるのが、国際派の画家 James McNeill Whistler (1834-1903) による、<<Symphony in White>> や <<Nocturne in Black>> といった共感覚的なタイトルを付された作品群ではないかと思いますが、Whistler はまさに、芸術を道徳的なメッセージから解放することを訴えた芸術至上主義者のひとりでした。有名な “Ten O’Clock lecture” で Whistler は当時盛んであった、住宅などを対象とした審美主義運動を引き合いに出した後、「芸術はおとしめられてきた。芸術とそういった実践行為との間にはなんの共通点もない。芸術は他者を改善しようなどと全く思っていない。」と述べています。

Alas! ladies and gentlemen, Art has been maligned. She has naught in

common with such practices. She is a goddess of dainty thought – reticent of habit, abjuring all obtrusiveness, purposing in no way to better others.

She is, withal, selfishly occupied with her own perfection only — having no desire to teach — [. . .]

(Whistler 4; 下線部は引用者による)

また才能ある芸術家に自然は歌をもって語りかける、そしてそういった選ばれた芸術家にのみ自然の神秘は明かされる、と Whistler は述べます。

[. . .] and Nature, who, for once, has sung in tune, sings her exquisite song to the artist alone, her son and her master – her son in that he loves her, her master in that he knows her.

To him her secrets are unfolded, [. . .]

(Whistler 14)

そして文学の世界においても、Whistler とよく似た音楽用語をタイトルとし、それまでのリアリズム的な文体から大幅に逸脱したスタイルで、旧来のモラルやジェンダー観を大胆に問い直すような短篇小説群を著し、世間に衝撃を与えた女性作家がいました。New woman writer の一人として近年再評価が進められている George Egerton (Mary Chevelita Dunne, 1859-1945)、本日登場する“George”の一人目です。George Egerton の最初の短編集 *Keynotes* (1893) は *Keynotes Series* の第一弾として発行され、その大胆な女性観の問い直しなどにより世間に衝撃を与えました。*Keynotes* に続いて出された Egerton の他の短編小説集、*Discords* および *Symphonies* も、やはり音楽用語をタイトルとし、音楽に重要な役割を与えています。

Keynotes 冒頭に収められた短編 “A Cross Line” からの有名な一節を見てみましょう。

Her thoughts shape themselves into a wild song, a song to her steed of flowing mane and satin skin; an uncouth rhythmical jingle with a feverish beat; a song to the untamed spirit that dwells in her. [. . .] She can see herself with parted lips and panting, rounded breasts, and a dancing devil in each glowing

eye, sway voluptuously to the wild music that rises, now fast, now deliriously wild, seductive, intoxicating, with a human note of passion in its strain. [...] Her eyes have an inseeing look, and she is tremulous with excitement. She can hear yet that last grand shout, and the strain of that old-time music that she has never heard in this life of hers, save as an inner accompaniment to the memory of hidden things, born with her, not of this time. (Egerton, “A Cross Line,” *Keynotes* 8-9; 下線部は引用者による)

下線部をたどっていきます。「彼女の思考は野生の歌の形をとった。開いた唇、あえぐ丸い乳房、そして輝く瞳には踊る悪魔を宿らせて、野生の音楽に官能的に身を揺らす自らの姿を彼女は目にする。」ここでの歌は、理性で統御された文化的な近代人の自己の深層にひそむ、原始的・野性的な本能や欲望を乗せて流れる底流が音楽の形をとったものです。

しかし、女性的な官能性や魔性の魅惑と結びついた音楽のイメージというのは必ずしも新しいものではないとお感じになるかもしれません。Byerlyが述べているように、セイレンのごとく誘惑する妖婦の歌というのは Thackeray、Brontë、Eliot らのヴィクトリア中期の小説にも見られ、さらにいえば古代ギリシャ以来の伝統でもあります。

The Romantic sense of music as the voice of Nature, Eliot’s representation of music as the language of one soul speaking to another, Hardy’s figuration of music as an expression of life itself: these compelling images have been juxtaposed against an alternative tradition, seen in Thackeray, Brontë, and Eliot, in which the dangerous, erotic power of music is exemplified by the siren song of the seductress. Both conceptions of music, however, positive and negative, see it as a uniquely powerful emotional force that can transcend (or appear to transcend) the obvious artifice of other artistic media because of its indeterminacy. (Byerly 189; 下線部は引用者による).

Egerton はそういった伝統にも連なっていますが、やはりそこには世紀転換期ならではの、また若くして北欧ノルウェーに渡り大陸ヨーロッパの

思想風土になじんでいた Egerton ならではの新しい要素が付け加わっているのです。

Iveta Jesova は、「型破りで過激なイデオロギーと、凝縮された文体、意識の流れや省略法といった形式面での同じく革新的な戦略」を組み合わせたと Egerton を評価し、当時流行の進化論的なディスコースや、そこで強調されていた身体面の特徴に関心を向けなかった彼女は登場人物の外面的特徴の記述にページを割くのではなく、彼らの心の中の連想や妄想に注意を向けたのだ、と述べます。

Her lack of interest in the popular evolutionary discourse and its obsession with physiological appearances is reflected in the attention given to her characters' mental associations and fantasies rather than to extended descriptions of their outward features. (Jusova 66)

語りは登場人物の五感が受け止めた印象、それが彼らの中に掻き立てた想念を中心にたどり、そこから彼らの主観的な心象風景が浮かび上がってきます。そこに流れる音楽というのは、この *Keynotes* においても、また特に 1898 年に出された *Symphonies* と題された短編集におさめられた数編において、人間の深層意識に働きかけ、性衝動と結びついた存在として表されていますが、だからといってそれが道徳的に非難されているというわけではありません。Egerton は“A Cross Line”の語り手に、「どんなに穏やかで善良な女性の中にも潜む原始的で野蛮な、飼いならされていない性質」が潜むのだ (Egerton, *Keynotes* 30) と言わせています。つまり、慎み深い女性は持ちえないと一般的に考えられ、語られていたようなかたちの欲望もその奥深く秘めているのが女性本来のあり方であると Egerton の作品は主張しているのです。

「男たちは人為的に道徳を造り出し、空飛ぶ鳥がつかうのと同様にそれ自体としては清らかである物事を罪であるとしたのだ」(49) と “Now Spring Has Come” の語り手は同時代の因襲的な性道徳を批判しています。*Keynotes* の物語群に登場する女性たちは灰色 (“gray”) を身にまったり灰色と結びつけたりして描き出されていることが目を引きませんが、彼女らは

従来の倫理基準のラインに従って白か黒かに区分されることを拒み、どちらにも色分けされない、従来の道徳観ではさばきえない amoral な存在であるといえます。そして彼女らに属する音楽や音楽的感性には女性の予言者の能力や、家庭や性差の境界を越えていく可能性を秘めた力としての機能が与えられています。

2冊目の短編集 *Discords* では、各セクションの冒頭に和音の音符が置かれています。



A PSYCHOLOGICAL MOMENT AT THREE PERIODS

I.—THE CHILD

THE lamp on the nursery table is yet unlit, and the waning daylight of the early spring throws the part of the room near the window into cold grey shadow. The fire burns with a dull red glow in the lower bars ; it has been slacked ; just one little bubble of gas seethes like a ball of molten jet and flickers into a bluish flame.

The quick patter of little feet, and the sound of

(Egerton, *Discords* 6)

あたかも世紀末という変化と混迷の時代、社会の空気の基調をなす不協和音を聞き取った作家がそれを散文の形へと織り込み織り上げて世の中に示そうとの決意が見て取られるようです。このような芸術家と音楽、世界との関係性のあり方、また従来の道徳観倫理観にとらわれない、あるいはそれらに挑戦するかのような態度においても、Whistlerと通じるものが確かにあるように思われますし、Egertonが、あるいはこのKeynote Seriesを立ち上げた出版社のJohn LaneがWhistlerを意識していた可能性は多分にあるかとは考えますが、直接的な影響をはっきり示す手がかりを得ているわけではありません。しかし、Egertonの作品内の音楽のイメージのソースになったであろうとほぼ確実に言えそうなものはほかにもあり、その一つがニーチェFriedrich Nietzsche(1844-1900)の哲学です。Egertonは

Keynotes のなかで Nietzsche に言及していますが (31;71)、これが Nietzsche が英語で言及され、英語圏に持ち込まれた最初の例だとされています。人間存在の根底をひそかに流れ、文化的な表面の秩序を揺るがす力を持つ底流としての音楽概念は Nietzsche の言う「ディオニュソスの音楽」と重なります。そしてその Nietzsche の音楽哲学形成に強い影響を与えたのが当時のヨーロッパを席捲していた Richard Wagner (1813-1883) の劇音楽でした。Wagner に対する人々の意見は両極に分かれていたといわれます。文化人の中にも Wagner に熱狂し、彼の音楽に着想を得た主題や技法を自らの芸術の中に取り込み、応用していった者もあった一方で、人々を墮落へと導く退廃的なものであるとしてその音楽を激しく糾弾する者たちもありました。後者の主な主張としては、Wagner の音楽が露骨にエロティックで、「性行為のオルガズムのクライマックスを模倣しており、不道德である」といったことがございました。

また、Jesova は当時の進化論的ディスコースと Egerton との間の隔たりを強調していましたが、Egerton の作品に現れる音楽と Charles Darwin が『人間の由来』(*The Descent of Man*, 1871) で述べている音楽の起源および進化についての考えには共通性がみられるともいえます。Darwin はこの著作の中で、今日の人間も音楽によって深く心を揺さぶられるのはそれがヒトがヒトとなる以前の太古の祖先の記憶、求愛や戦いの際のさえずりといったものにこめられた強い感情を呼び起こすからだと説明しています。音楽は言語の成立に先立つコミュニケーションツール、感情の媒介手段であり、言語によって分節される以前のより根源的な衝動や深層意識と結びついたものであると考えられたのです。ただし、これと同様の考えを Darwin と近い関係にあった Herbert Spencer は『人間の由来』出版より早い 1850 年代にすでに述べており、さらには 18 世紀に活躍した Jean-Jacques Rousseau も類似の考えを示していたことが Byerly の本に出ていますので、影響関係を単純に一对一の対応へと還元しようとするのは乱暴な試みであるかもしれません。

II. George Sand (1804-1876) の影響と英国小説における Superdiva たち

さて、先ほど、Egerton の作品における音楽には性的なニュアンスだけ

ではなく、女性に宿る予言者的な能力や、家庭や性差の境界を越えていく可能性を秘めた力があると思うと申し上げました。このような音楽イメージはどこから来たものなのか、これについても、一対一の対応関係の中に影響をたどろうとすることには無理があるかとは思いますが、本日のお話の中でのフランスからのGeorge代表、ジョルジュ・サンドGeorge Sandの影響がおそらくそこにはこだましているのではないかと、それだけにとどまらず、Sandの影響は、見落とされがちではありますが、19世紀後半の英文学における音楽表象・音楽家表象には非常に大きいものであったのではないかとこのことを指摘したいと思います。Byerlyは前掲した引用下線部の「エロティックで危険な音楽概念」に対立するものとして、「道徳的な影響力としての音楽」や「[George] Eliotによる[本日第3のGeorgeです]による、人の魂と魂の間の言語としての音楽表象」をあげていますが、そういった、道徳的なエージェントとしての音楽観を広め、定着させることにおいて、Sandの作品群、とくに音楽家小説『コンシュエロ』(*Consuelo*, 1842-3)およびその続篇『ルードルシュタット伯爵夫人』(*La Comtesse de Rudolstadt*, 1843)はあずかって力があつたと考えられます。

Byerlyは次のように述べます。「音楽は19世紀美学において特権的な地位を得ていたにもかかわらず、職業としては高く評価されなかった。Eliotの音楽表象はRousseau、Schopenhauer、Hegel、Herbert Spencer、そしてFranz Lisztといった多様な理論家たちの影響を受けていた。」このようにByerlyはGeorge Sandの名前は上げておらず、またこの著書*Realism, Representation, and the Arts in Nineteenth-Century Literature*の全体を通してSandについて触れてはいないようです。Eliotは理想主義的な社会思想家でもあったFranz Lisztと直接の親交があり、後期の小説*Daniel Deronda* (1876)では彼の名前に言及してしますので、高貴な存在としての芸術家像を構想するうえでの彼の影響の大きさは否めないものの、同じ*Daniel Deronda*の中に登場するMirahのような、美しい歌声と内面の崇高な魂、そして社会的使命とが一体となった歌姫像というのはやはりSandの『コンシュエロ』という先例があつてこそ実現したものであろうと考えられます。

George Sandについては特に、「ピアノの詩人」ショパンFrédéric Chopinとの恋愛関係がよく知られていますが、それに先立ってFranz Liszt、

Hector Berlioz、Giacomo Meyerbeerといった音楽家たちとも深い親交を結んでおり、彼らの生き方や思想から大きな刺激を受けていました。そして、小説『コンシュエロ』および続篇『ルードルシュタット伯爵夫人』のヒロインである歌姫コンシュエロが体現する、人々を魅了し圧倒する歌声および歌唱力と、人々の道徳的模範ともなるような人格とを兼ね備えた理想化された芸術家像を造形するにあたって直接の着想源になったのは何よりも、優れた作曲の才能も持つ歌手Pauline Viardotとの出会いと友情関係でした。SandはViardotを深く敬愛し、彼女宛の書簡の中でその才能と人柄について最大限の賛辞の言葉を寄せています。

[Y]ou are the priestess of the ideal in music and your mission is to spread it, to make it understood, and to bring the recalcitrant and the ignorant towards an instinct for and a revelation of truth and beauty. (quoted in Rutherford 60)

そしてサンドは、女性オペラ歌手に対して一般的に抱かれがちであった「道徳的にいかがわしい、娼婦に近い存在」「エロティックなセイレン」といったイメージを転覆し、書き直すことを試みたのだと批評家Susan Rutherfordは著書*The Prima Donna and Opera, 1815-1930*の中で述べます。George Sand自身、幼少時から音楽に対する優れた感受性を持ち、身体的な反応を示すほどであったということも、彼女の作品世界において人間に大きな影響を持つ音楽の力の描出を可能にした要因の一つと言えるでしょう。

オペラというのは多くの人を集め、またそこで女性が中心的な役割を演じることのできる数少ない場でもありました。コンシュエロがその典型といえるような、プロト＝フェミニスト的な女性の理想像としてのプリマドンナ像を批評家Susan Rutherfordは“superdiva”と呼びます。『コンシュエロ』はスタール夫人(Mme de Staël)の『コリンナ』と並んで、英語圏の女性読者たちに、女性は男性芸術家のための靈感を与えるミューズであるだけではなく女性の天才というものの存在も可能なのだと気づかせる大きな役割を担ったのだとL. M. Lewisも述べています。

小説『コンシュエロ』の冒頭部分においては、18世紀のヴェネツィアが舞台とされ、主人公コンシュエロ¹は貧しいけれど清らかな暮らしを送りつつ、教会付属のメンディカンティとよばれる音楽院で学ぶ孤児です。スペイン系の血を引きますが、父親が誰であるかはわかりません。その澄んだ歌声および歌唱の才とストイックな訓練の努力において抜きんでた存在ではあるものの、この時点でのコンシュエロは外見においては貧相でやせっぽち、周りに見劣りするほどであるとされます。しかし彼女がさらに研鑽をつみながら成長していくにつれて、その内面の魂の美しさが外見に反映されるようになり、お金持ちのディレッタントから目をつけられ、舟遊びに誘い出されて危うく船上で襲われそうになる、さらに続篇の『ルードルシュタット伯爵夫人』に至っては、プロイセン国王フリードリヒ二世から執拗に迫られるなどの目に遭います。その度にコンシュエロは権力にも策略にも臆することなく難局を切り抜け、自らの主義と純潔を守り通します。コンシュエロの歌と音楽的才能は国境や身分の違いといった境界を超えていく力ともなります。

この作品にはもう一人ほかにも、超自然的な音楽の天才といえる主要な人物がでてきて、それは物語の後半でコンシュエロと結婚することになるバイオリンの名手、アルベルト伯爵です。この人は透視や予知の能力を持つ一方、祖先の罪についての深い悩みにとらわれ常に憂鬱でもあり、突然家族の前から姿を消して数日間引きこもってしまうという奇癖を持ち、天才ゆえの繊細さ、精神的なもろさも示している人物で、坂本千代氏と加藤由紀氏の共著『ジョルジュ・サンドと四人の音楽家』では、LisztとChopinという二人の天才音楽家両方の面影がアルベルトの造形の中には見られるということが指摘されています。コンシュエロとアルベルトの二人は続篇『ルードルシュタット伯爵夫人』において、国家権力による前者の不当な監禁・幽閉などさまざまな苦難を乗り越え、最終的には秘密結社のメンバーとして自由・平等・友愛に基づいた社会の実現をめざしていくことになりますが、それがのちのフランス革命へとつながっていく動きとなることを予感させながら物語は幕を閉じます。

これら真に優れた人格を基盤とする天才的な音楽の才能を示す登場人物たちが人の、そして芸術家の生きる上での指針や理想を示している一方で、

うわべのみの技巧や新奇さで人々の注目を集めることには成功しても、真の人格の深みや音楽への真剣な取り組みそして理解を欠くためその成功が長続きしない歌手たちも登場します。*Daniel Deronda* のような George Eliot の小説世界との類似が見て取れるかと思います。

『ベルグラヴィア』(*Belgravia*, 1868年6月号)において過去も現在もジョルジュ・サンドの小説は「もっとも不道德である」と断罪されるなど、Sand は物議を醸す作家でありましたが、『コンシュエロ』は英国で多くの読者を獲得し、大きな影響力を持つことになりました。1877年に Matthew Arnold は、1842年に刊行されたこの作品がその後30年を経てもイングランドで一番人気の作品としての地位を保っている、と述べています (quoted in Lewis 42)。

George Sand が George Eliot や George Egerton といった「女性の George たち」に与えた影響については Lewis がすでにふれているため (13)、ここからは、ほかの人たちによってあまり注目されている気配のない、男性 George たちと George Sand との関係へと話を移すことにします。

George Sand は同一人物を主人公としながら、彼女の境遇の変化に応じて一巻目のタイトルを『コンシュエロ』、その続編には『ルードルシュタット伯爵夫人』とつけましたが、George Meredith (1828-1909) および George Moore (1852-1933) もおそらく George Sand に倣って同一の歌姫を主人公とする二巻セットの続き物小説を書き、前篇と後篇にそれぞれ、その時点での彼女らの立場を表す呼び名をタイトルとして付けました。George Meredith の *Emilia in England* (1864)。このタイトルはのちに *Sandra Belloni* と改変されますが、こちら一巻目においては天才的な音楽家の精神的な浮き沈みや、身分違いの結婚の問題に焦点が当てられ、二巻目 *Vittoria* (1867) では *superdiva* が直接的にその歌声で社会を動かしていく、具体的には、イタリア独立革命の大きな推進力となるというように、二巻構成全体の構造も George Sand の作品のそれを踏まえていると考えられます。

そして、George Moore の *Evelyn Innes* (1898) および *Sister Teresa* (1901) のセットについてですが、これらは従来の批評では、『コンシュエロ』のような理想主義的な作品とはむしろ対立するものであるかのように見なされてきました。ヒロインである Evelyn は、アイルランドで Palestrina の復興に

熱中する貧乏な音楽家の父のもと育てられますが、若くして亡くなったソプラノ歌手であった母譲りの美声を持っており、Wagner 愛好家である父の友人 Owen Asher から、彼の愛人となることを条件にパリで音楽のレッスンを受けさせてくれるとの誘いを受けます。Evelyn は悩みます。ここで Owen についていくことは罪深い女の一人となることであり、父を裏切って一人ぼっちにしてしまうことでもある。しかし、父のもとにとどまることはすなわち自分の才能を葬ることになる。

女性の美德として社会が求める自己犠牲と、芸術家としての自らの才能に対する義務・責任や使命感との間の葛藤というテーマは、Sand の『コンシュエロ』においても中心的なものでした。Evelyn はパトロンとなる Owen に早々に身を任せてしまう点でコンシュエロとは異なり、これにより性的に墮落した fallen woman と批評家たちに見なされがちなのもありますが、また Evelyn 自身も自らを罪深い存在であると考えて悩み、Owen の元を離れて修道院にこもったりするのですが、物語の語りには彼女に対しネガティブな道徳的判断を下すようなところは決してみられません。

Evelyn は一貫して自分の芸術、そして自己の本質と真摯に向き合おうとする優れた芸術家であり、彼女自身が肉体と精神との相克に悩むからこそ、彼女は Wagner の音楽の本質を自分にとっての真実として深く理解し、それを舞台の上から聴衆につきつけることができるスーパーディーヴァであるのです。続篇 *Sister Teresa* において自分の才能と人生を他者のために捧げたいという気持ちが強まった Evelyn は、聖職に対する自己の適性については悩みながらも修道女として生きる道を選びます。

ここで今一度、Byerly からの引用文にかえてみたいと思います。ここでは、「道徳的なエージェントとしての音楽」と、「エロティックな危険を持つ音楽」とが完全に別のものとして対立しているかのように語られていました。また Phyllis Weliver も、*Women Musicians in Victorian Fiction, 1860-1900* (2000) において、後期ヴィクトリア朝小説において音楽的な才能を持つ女性登場人物が、当時の倫理基準に則った「天使」か「悪魔」かという二項対立によって明確に区分される形で造形されていたというように論じていますが、George Moore が *Evelyn Innes* で行ったのは、これらの間にあると考えられていた境界を問い直し、崩すことであったといえそうです。

Wagner のオペラの「ライトモチーフ」を散文に取り込むことで「内的独白」の実験的文体を創始したフランス人作家 Edouard Dujardin と Moore は友人関係にあり、*Evelyn Innes* 執筆時までには Wagner のオペラや Nietzsche の哲学にも親しんでいましたし、また George Egerton の音楽的な短編もきっと読んでいたと思われます。*Evelyn Innes* における音楽は意識と無意識との境界、精神と身体との境界を侵犯し、無効化していき、それによりヴィクトリア朝的な道德規範や女性観は揺るがされることになります。そしてそこから、Moore は“melodic line”と呼ばれる後期の文体を発展させていくことにもなるのです。

注

- 1 英語圏以外の外国語の固有名詞については、適宜カタカナ表記を優先した記載方法をとらせていただく。

引用文献

- Byerly, Alison. *Realism, Representation, and the Arts in Nineteenth-Century Literature*. Cambridge UP, 1997.
- Egerton, George. *Keynotes*. London: Elkin Mathews and John Lane, 1893.
- . *Discords*. London: John Lane, 1894.
- Jusova, Ivetta. *The New Woman and the Empire*. Ohio University Press, 2005.
- Lewis, L. M. *Germaine De Staël, George Sand and the Victorian Woman Artist*. University of Missouri Press, 2003.
- Pater, Walter. *The Renaissance*. 1873. Randon House.
- Web. http://archive.org/details/renaissance_034976mbp/page/ull/mode/2up/
- Rutherford, Susan. *The Prima Donna and Opera, 1815-1930*. Cambridge UP, 2006.
- Sand, George. *Consuelo*. Amsterdam: Fredonia Books, 2004. (1842-43)
- . *The Countess von Rudolstadt*. 1843. Trans. Gretchen van Slyke. Philadelphia: Pennsylvania University Press, 2008.
- Weliver, Phyllis. *Women Musicians in Victorian Fiction, 1860-1900*. Hans: Ashgate, 2000.
- Whistler, James McNeill. *Mr. Whistler's Ten O'Clock*. Thomas Bird Mosher, 1916.
- Web.
- 坂本千代・加藤由紀著『ジオルジュ・サンドと四人の音楽家：リスト、ベルリオーズ、マイアベーア、ショパン』彩流社、2013年。

——近畿大学教授

Summary

Music Through Georges

Akemi Yoshida

This paper, which constitutes a part of a symposium entitled “The Victorian Age and Music: Boundaries in Conflict,” looks at the interface between music and literature, focusing its attention specifically on the proper noun “George,” aiming to explore the ways prose works of the late Victorian period underwent thematic and stylistic innovations and transformations, through ardent assimilations and imitations of music.

As an example of an artist whose work “aspire[d] towards the conditions of music,” one could be reminded of the cosmopolitan painter James McNeil Whistler, who gave to his paintings not only synaesthetic titles that combine musical terms with colours, like *Symphonies in White* and *Nocturne in Black*; but also characteristics associated with music, capturing and presenting the transient effects of tones and shades of colours, transitory forms of objects and the resonance they compose. The thematic and stylistic innovations George Egerton (Mary Chevelita Dunne, 1859-1945), one of the chief “New Woman” figures active around the *fin-de-siecle* London literary scenes, made in her fiction could be comparable, in many ways, to Whistler’s achievement in the field of beaux-arts. The titles of her short story collections; *Keynotes* (1893), *Discords* (1894), *Symphonies* (1897), and *Fantasias* (1898), would show that her work surely “aspire[s] to the state of music.” *Keynotes* and *Discords* constitute the first two volumes of John Lane’s Keynote Series.

The latter half of this paper then focusses on how the influence of George

Sand could make possible the emergence of empowered female figures associated with a great musical gift, who could be called “superdivas,” in novels written in English by authors such as George Meredith and George Moore.